

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：32663

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884054

研究課題名(和文)平安仮名文学の受容と生成の研究 『枕草子』の諸本分析を軸として

研究課題名(英文)On the Reception and the Creation of Kana Literature of the Heian period: on analysis of textual variations in Makura no soshi

研究代表者

山中 悠希 (YAMANAKA, Yuki)

東洋大学・文学部・講師

研究者番号：40732756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安時代に仮名で書かれた散文作品が、編纂・引用・加工といった多様な形で享受され、生成されていく様相とその意味について、『枕草子』の諸本研究の視点から追究するものである。本研究期間においては、主に塚本系統の写本の調査と分析を行い、これまで積み重ねてきた基礎的調査をも総合した最新の成果を、自著『塚本枕草子の研究』にて発表することができた。『塚本枕草子本文集成』の翻刻に見られた誤りに関しても修正を行った結果、より実態に即した本文分析を達成することが可能となった。また、シンポジウム報告および論文(単著)の執筆を通して、『枕草子』の受容の問題、諸本の編纂意識の問題へと迫ることができた。

研究成果の概要(英文)：I pursue aspects and meanings of the reception and the creation of Kana prose written in the Heian period: on various organization, quotation and processing. In this period, I mainly investigated and analyzed manuscripts in the imperial hand within the Sakaibon manuscript tradition of Makura no soshi. Gathering analysis yet written, I published the latest results in my own book Sakaibon Makura no soshi no Kenkyu. Making a correction of transcription in Sakaibon Makura no soshi Honmon Syusei, I disclosed the actual condition of the text of Sakaibon manuscript tradition of Makura no soshi. I studied the reception and the intention of editing Makura no soshi in conference papers and journal articles.

研究分野：平安文学

キーワード：枕草子 諸本 享受

1. 研究開始当初の背景

『枕草子』の本文は、池田亀鑑氏により四系統に分類された。諸本研究を進めた楠道隆氏は、様々な内容の文章が混在している三巻本・能因本を雑纂形態(雑纂本)とし、それに対して内容ごとに記事が分類されている堺本と前田家本を類纂形態(類纂本)とし、類纂本は後人が増補・改作を行ったものであると論じた。以後、『枕草子』の諸本研究は、本文の成立過程を探り、清少納言が書いた『枕草子』の原態を究明する議論が主流となった。三巻本が比較的『枕草子』の原態に近いのではないかという意見が優勢となり、三巻本を中心に『枕草子』の研究は進められることになり、他系統の本文が顧みられることはほとんどなくなっていたが、近年、従来の三巻本至上主義の『枕草子』研究に対して、『枕草子』の本文が異なるかたちで複数存在すること自体を再評価する動きが出てきた。津島知明氏は、『枕草子』の諸本の本文は過渡的なものと捉え、異本化という新しい観点から諸本の問題を論じている。小森潔氏は、異本を「創造的な受容」の結果と捉える見方を提言し、そのなかでとくに注目すべきものとして堺本枕草子の名を挙げている。また、『源氏物語』古注釈書に引用された『枕草子』本文の検討も沼尻利通氏により行われている。このように『枕草子』の本文研究は新しい局面を迎えようとしている。

このような状況下において、これまで行ってきた『枕草子』の本文研究をより深化させ、平安時代の仮名で書かれた散文作品の受容と生成の問題を明らかにすべく、本研究を開始した。本研究は主に堺本系統の『枕草子』を調査対象とするが、たとえば現存最古の『枕草子』写本である前田家本(鎌倉中期以前の書写)は、堺本の内容を撮取して作成されたと考えられており、鎌倉時代の初頭までには、ある程度現存本に近いかたちの堺本が成立していたと考えられている。また、『光源氏物語抄(異本紫明抄)』などの、鎌倉時代に作られた『源氏物語』古注釈書には、堺本系統の『枕草子』が引用されており、堺本系統の本文を有する『枕草子』が、平安末期から鎌倉初期という時代にはすでに流布し、読まれていたことがわかる。このようなことから、『枕草子』の享受の歴史や読者の問題を考えるにあたって、堺本『枕草子』の研究が重要な意味をもつと考えた。

2. 研究の目的

『枕草子』は平安時代に女性によって書かれた仮名文学の中でも著名なもののひとつであるが、本文系統に難しい問題を抱えており、また後世『源氏物語』のように聖典化はされなかったこともあり、知名度に比して本文の基礎的な研究が必ずしも十分に進んで

いなかった。しかし、一条天皇の時代を背景にもつ点でも『枕草子』は文学史上重要な位置にあり、その多様な本文は各時代の読者による様々な受容のありようを伝えている。『枕草子』本文の一系統である堺本の多角的な分析を軸として、平安時代の仮名文学が、編集・編纂・改変・異本生成などの加工行為及び引用行為を経ながら、享受されつづけた様相とその意味について探究することとした。

3. 研究の方法

『枕草子』の異本とその本文系統の分析を行うこととした。特に堺本系統『枕草子』を中心に、各伝本の本文調査を行い、データの分析を行うこととした。現在刊行されている堺本本文の翻刻を掲載した『堺本枕草子本文集成』(林和比古氏、1988年、私家版)の翻刻には誤りがあり(申請者独自の調査により龍門文庫本の翻刻に誤りが多数みられることを発見している)、再調査・再分析が急務となっていた。また、現行の本文系統分類法にも問題があることが明らかになっており、改めてデータを集計し、新たな分類案を提示することとした。

また、伝本の研究を通して、後世における『枕草子』享受の様相を明らかにすることとした。『枕草子』の享受史は資料が少なく分からないことも多いため、調査の結果は『枕草子』受容の様相を示すものとして重要なデータとなった。

4. 研究成果

本研究は『枕草子』の享受の歴史と読者の問題に、異本生成という側面から迫ることを目的としたが、とくに堺本系統諸本の基礎的な文献調査を充実させ、そこから得られたデータ分析をもとに『枕草子』の本文研究を深化させることができた。

第一に、阪本龍門文庫蔵「清少納言枕草紙」の書誌調査を行い、すでに出版されていた翻刻からは落ちていた傍記・書き入れに関して、実見によって確認した。そこから明らかになったことのひとつに、江戸前期の水戸藩における国学者周辺の『枕草子』異本享受のありようと『枕草子』研究の実態がある。たとえば、龍門文庫本下巻二丁オモテの本文「ゑかき」の「き」字の傍には朱で「に光御本」と注記されているが、これが何を指すのかは不明であった。そこで一案として、堺本の中の一系統である「後光厳院宸翰本」で注記したことを示しているのではないかという推論を示した。実際に、現存する宸翰本系の本文はすべて「ゑかに」となっており、傍記の記述と一致する。同様の例は三丁オモテにも見られる。こちらは非宸翰本系の山井本にも一致する本文があるものの、山井本の本文の状況と奥書の内容からすると、龍門文庫本を山

井本で注記したとは少々考えにくい。よって、「光御本」が宸翰本のことを指す可能性は低いものと思われる。また、上巻一九丁オモテの本文「みたれ」の「み」字に傍記された「うい」という注記にも注目した。この箇所本文が「う」となっているのは、宸翰本系の現存本の中では彰考館本のみである。龍門文庫本には、宸翰本との異同を朱で注記したとする板垣宗愴の奥書と、宗愴所持本を朱の小書等も含めてそのまま書写したとする田村建頭の奥書がある。宗愴は『大日本史』編纂にも携わった水戸藩の国学者である（石山洋ほか編『江戸文人辞典』東京堂出版、1996年）。したがって、これらの注記を、彰考館本かそれに連なる写本を使用して宗愴が施した注記と考えることも可能ではないかということ、論文「阪本龍門文庫蔵『清少納言枕草紙』にみえる江戸前期『枕草子』享受の一樣相」において推定した。これらの注記は宗愴の『枕草子』享受の一端と言えよう。奥書には能因本と版本の本文への言及もあり、宗愴が本文系統の違いについて把握していたことが知れる。問題点としては、非宸翰本系の鈴鹿本の本文の一致が挙げられる。宗愴の立場等を考えれば彰考館本系の本を使用した可能性が高いと思われるが、類例のさらなる分析が今後の課題である。

なお、龍門文庫本の調査結果は、2016年度末に刊行した自著『堺本枕草子の研究』において行った堺本系統本文の網羅的な調査とデータの解析にすべて反映させた。従来我々が知ることのできる情報は『堺本枕草子本文集成』に掲載されている翻刻のみであり、当初はその情報をもとに分析を行っていたものの、とくに龍門文庫本の翻刻に関しては全体的に誤りが散見され、本文分析を行うにあたって、誤った結果が出てしまうことを危惧していた。よって、自著『堺本枕草子の研究』においては龍門文庫本の本文をすべて自分の目で確認し、正しいデータに基づいて本文の分析を行った。今後の『枕草子』の本文研究に資する結果を出すことができたものと思われる。

次に、いくつかの機関を訪問調査した結果、これまでに紹介・調査されていなかった堺本の伝本が複数あることが判明した。具体的には以下の諸写本である。

- (1) 実践女子大学黒川文庫蔵「清少納言枕草紙」上下
- (2) 実践女子大学黒川文庫蔵「枕草紙」後光厳院宸翰御本写上下
- (3) 相愛大学春曙文庫蔵「清少納言枕草子」上下
- (4) 相愛大学春曙文庫蔵「異本枕雙紙全」

これらの写本は新出資料であるため調査の重要性がきわめて高い。しかしながら先行の調査報告等がまったく存在しないため、翻刻から取りかかる必要がある。本格的な作業にはかなりの時間がかかることが予想された

ため、まずは基本的な書誌調査と本文の性質の把握を行った。

その結果、現時点では、(1)は宮内卿本系統の本ではないかと考えられること、(2)は群書類聚本の本文と似ており、群書類聚本の写しかと思われること、(3)は宮内卿本系統の本であり、河野甲本・朽木文庫本・鈴鹿本に近い本文をもつと考えられること、(4)は宸翰本系統の本であり、河野乙本・京都大学本に近い本文かと思われることを述べた。これからの課題としては、それぞれの伝本の全体を翻刻し、本文分析を行い、堺本の諸本のなかにどのように位置付けられるかと明らかにする必要がある。また、当初計画していた京都大学蔵本等の調査に関しては、今後の課題とした。

次に、『堺本枕草子本文集成』に収録されている諸写本のうち、実見がまだであった前田家尊経閣文庫蔵「四季物語(異本枕草子)」、および静嘉堂文庫蔵「異本枕草子 完」の調査を実施した。とりわけ、前田家尊経閣文庫蔵「四季物語」に関しては、貞享四年の記載がある巻末の識語において、この写本が稀少な本として丁重に扱われつつも、『枕草子』ではなく鴨長明の『四季物語』として認識され、享受されていたことが記されており、注目に値した。この記述からは、『枕草子』の写本の近世における受容の実情がわかるだけでなく、そもそも、内容を一読しても『枕草子』と認識されることなく、別の作品として扱われ、価値付けられていたという事態から、「枕草子とはなにか」という根本的な問いかけが浮上したのであった。これらの基礎的調査の成果は、本年度末に刊行した自著『堺本枕草子の研究』へも取り入れることができたが、資料全体の翻刻等を終えることはできなかったため、引き続き、個人的課題として取り組んでいきたい。

また、『枕草子』と諸本の問題を論じたシンポジウム報告を1件、および論文(単著)を2本発表した。シンポジウムにおける報告とそれをもとに執筆した論文「『枕草子』の本文における「女」三巻本と他系統本の比較から」においては、前述の「枕草子とはなにか」という問題とも絡んで、現在の『枕草子』と「清少納言」に対するイメージがどのようなものであるのかを探り、そこに内包されている問題を、『枕草子』の諸本分析によって逆照射した。この問題については、今後さらに、古典受容を取り巻くジェンダーの問題の側面からも検討していく必要があると考える。

もう一本の論文「『枕草子』「殿上より」の段の本文異同と前田家本の編纂方法 漢詩文をふまえた応酬をめぐる」においては、『枕草子』の諸本本文の比較から、現存最古の『枕草子』写本である前田家本本文の性質と、そこからうかがえる編纂意識について論じた。当該論文では、とくに漢詩文引用の見られる記事を中心に検討を行い、前田

家本における漢詩文引用と引用の行われた場に関する表現が、他系統本におけるそれに比して、男性貴族とのやりとりという側面が焦点化されていることを述べ、そこに前田家本編纂者の解釈が介在している可能性を論じた。前田家本の編纂された平安末期から鎌倉初期における『枕草子』受容の一面を映していると言える。

以上の研究成果によって、『枕草子』がさまざまな加工行為・引用更衣を経ながら享受されてきた様相について探究するという当初の研究目的は果たすことができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

山中 悠希、『枕草子』の本文における「女」三巻本と他系統本の比較から、中古文学、査読無、96号、2015、54-62

山中 悠希、『枕草子』「殿上より」の段の本文異同と前田家本の編纂方法 漢詩文をふまえた応酬をめぐる、小山利彦・河添房江・陣野英則編 王朝文学と東ユーラシア文化、査読無、2015、353-376

山中 悠希、阪本龍門文庫蔵『清少納言枕草紙』にみえる江戸前期『枕草子』享受の様相、日本文学文化、査読無、14号、2015、55

〔学会発表〕(計1件)

山中 悠希、『枕草子』の本文における「女」三巻本と他系統本の比較から、2015年5月30日、2015年度 中古文学会 春季大会「女性文学としての中古文学 ミニシンポジウム2 注釈のジェンダーバイアスを問う」、白百合女子大学

〔図書〕(計1件)

山中 悠希、武蔵野書院、堺本枕草子の研究、2016、470

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

山中 悠希 (YAMANAKA, Yuki)

東洋大学 文学部 講師

研究者番号：40732756

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：